

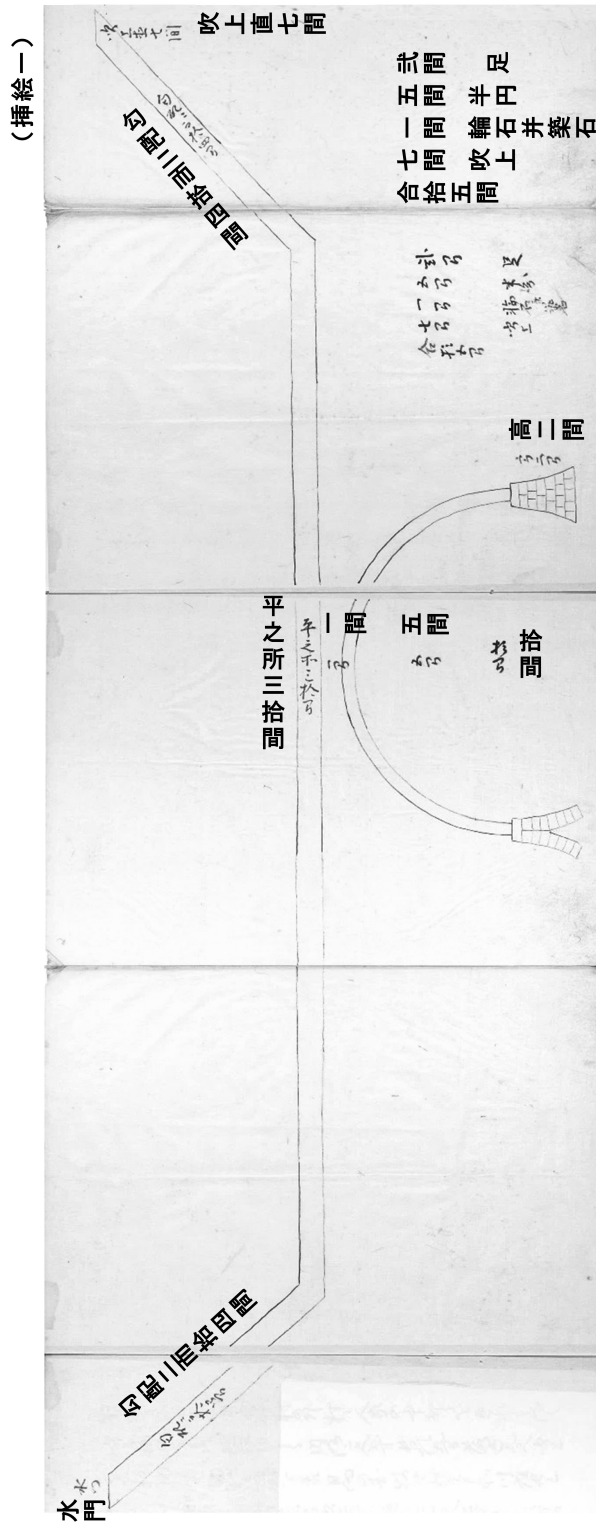
【史料一】（通潤地区土地改良区所蔵）

（表紙）

通潤橋仕法書

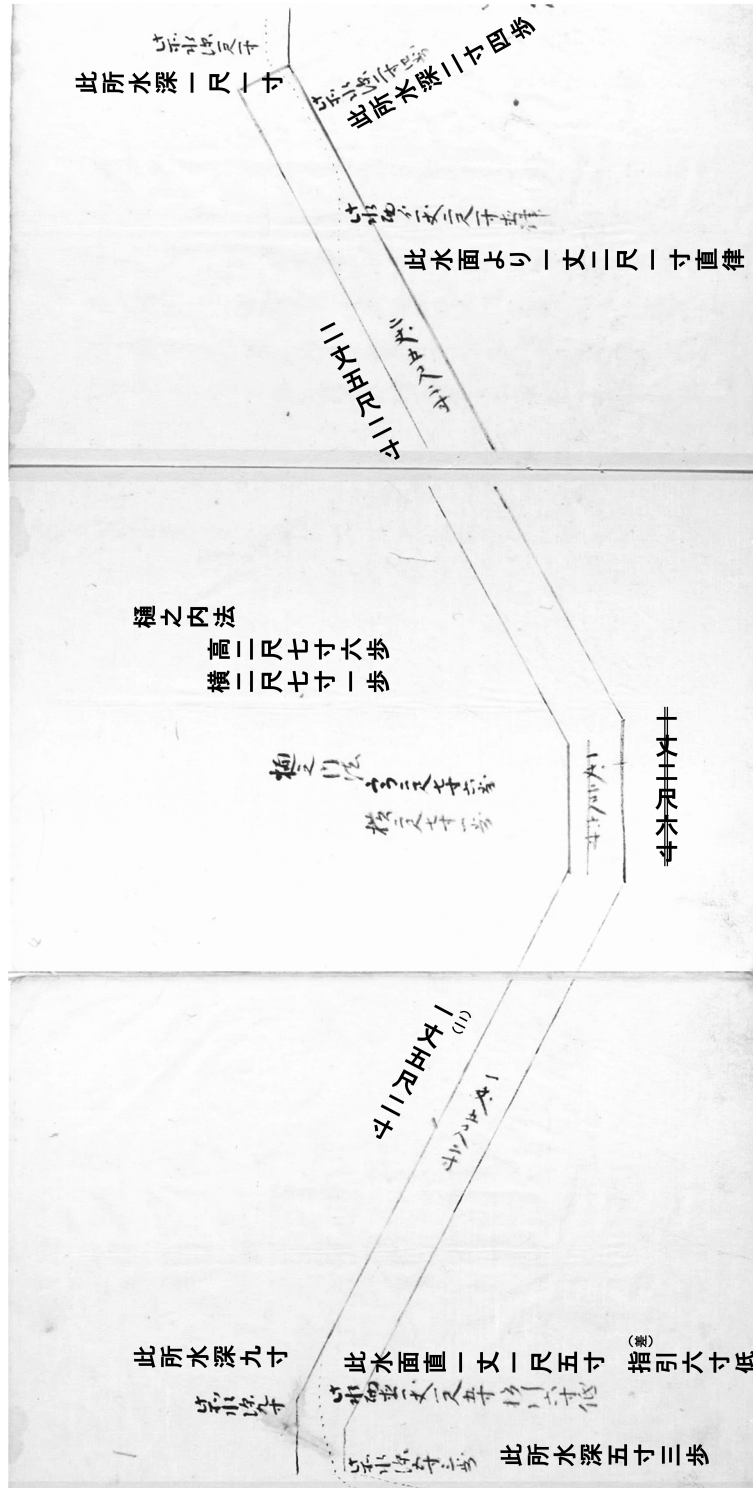
（本文）

南手在に毎原川を移すに、轟川車橋高五間、足二間、輪石と築石一間、都合八間築、其上水戸にて移すも田になすこと少、また村々人家のあたりに通水しかね、人馬の喰用に成かたき村々有、よつて車橋八間のうへ、七間の吹上樋にて水を移すときハ、都合高拾五間に成る、左の図に顯す、



右図のとふりにてハ、長野村の外、村々人家の中ほどを通水する也、吹上樋のことは、廻江内にて内法二尺五寸、長拾九間、落込九尺、吹上六尺、板樋にして田地三百町を養、日向の国牧野村と申所、川底長三十間、吹上樋落込二間、吹上九尺、樋の口一尺七寸にて、拾町の田を養ふ、打込二間は次第下りの所、長廿六間有る也、薩州家中ノ大名屋敷泉水、吹上水戸にて拾間余も有り、仕法ハ聞取得す、所柄また近方にて、竹筒にて喰用水の吹上樋ハ間々多し、然れとも高六、七間、水勢多吹上樋の例を聞ず、故に嘉永四年亥十月十二日、轟川にて樋の内法二尺七寸方、板の厚一寸五歩、三尺越し、橋締にて、高九尺九寸にして通水試るに、九寸低にして通水しけるに、忽ち樋板も割、橋も崩れ、例しに成かたし、左の図に顕す、

(挿絵二)



嘉永五年子の春、五老ヶ瀧吹上の所に准し、高七間、平の所三

十間にして、笹原川にて板厚二寸、五寸角の^(櫓)柱三尺越にして、同年閏二月十四日試るに、直律四間半吹上たる時、数ヶ所^(櫓)板破れ通水しか

たき故、激する所は石にて



此通りにして接目漆喰にて

堅め猶試るに、漆喰吹出し石^(櫓)も半を過割れ、厚二寸の松板

も損し保かたし、よつて張りわ四寸に石の^(櫓)操貫にして○の^(櫓)條の仕法石^(櫓)漆喰種々に

試るに一つとして保かたし、其訳ハ漆喰乾ぐと石との間た厘毛の

透目出来る故也、後道奥の漆喰の条に^(櫓)頭す通りの仕法にて、水ハ

保つといへども、吹上の曲り手十三、四間の間、厚四寸の^(櫓)操坂の石^(櫓)も板

^(櫓)も破れ、通水しかたし、激する所、石^(櫓)の張りわ一尺にして接目鉄

鑄込ミと前文の漆喰にて堅め、板^(櫓)者一尺五寸越に^(櫓)を懸、嘉

永五年子三月十三日に試るに異儀なく通水し、落込高七間、

吹上六間五尺四寸、さし引一尺二寸低、左の図に^(櫓)頭す、

(挿絵三)

附、板^(櫓)一尺五寸越しの^(櫓)締にして、厚二寸、三寸の板、水の

激する所ハ板、弓を張る^(櫓)出故、板の厚ミを増とも

洩なきよふに行れかたく所、石の^(櫓)操坂を後段漆喰

の仕法にて永続の見直、治定する也、鉄鑄込の接目

ハ水洩るゆへ、塩水をたゞへさひを出して洩を留る也、

鉄鑄込ハ堅固なれとも接手の仕替・手入にて間延に

なり、造作も多き也、水の激すること、杉の板目をし

たひ木口より水をしめ出し、前に^(櫓)頭す通り二寸、三寸の

板一尺五寸の^(櫓)問ひにて弓を張ることにて、激

水の甚敷を知へし、

○鉄鑄込ハ穴に入るほどの鉄棒ふひごにてわかし、

廿扁ほと穴に^(櫓)指入れ、石の^(櫓)漆氣を去り能乾き

石のあたゞまり強き故、鉄と石之思ひ合よき也、

○吹上^(櫓)高六間五尺四寸、試るに異儀なけれども、余吹上高く

といふ論説有て、○左右の^(櫓)盤石より輪石築立、祇用船津橋

の仕法を踏、橋幅十五間三尺、半円、七間七合五勺、輪石の厚三尺、

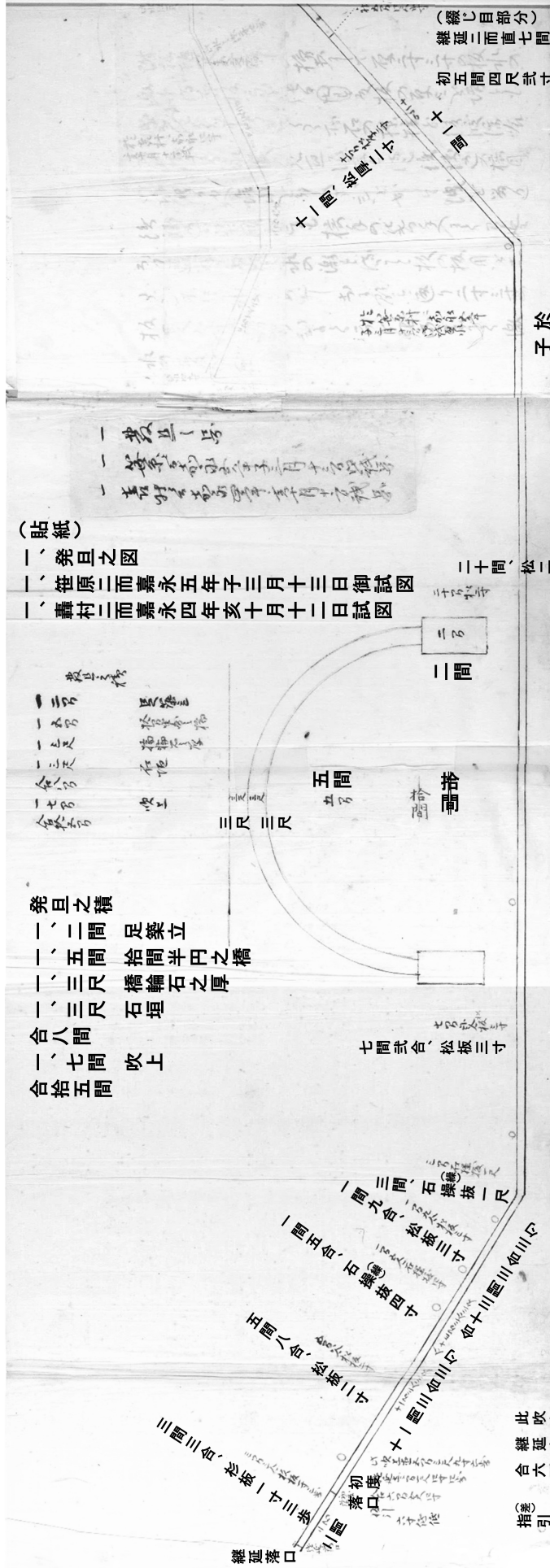
築石三尺、惣高拾間七合五勺二成、吹上^(櫓)直律四間に成、夫たけ

^(櫓)ハ丈夫なれども、橋の太く成たけ造作多くなる也、間数格好

左の図に^(櫓)頭す、

(挿絵四)

(挿絵三)



(繼七目部分)
 繼延三而直七間六寸溜
 初五間四尺貳寸

於笹原村二嘉永五年
 子三月十三日御試通水

(貼紙)

- 一、発旦之図
- 一、笹原二而嘉永五年子三月十三日御試図
- 一、轟村二而嘉永四年亥十月十二日試図

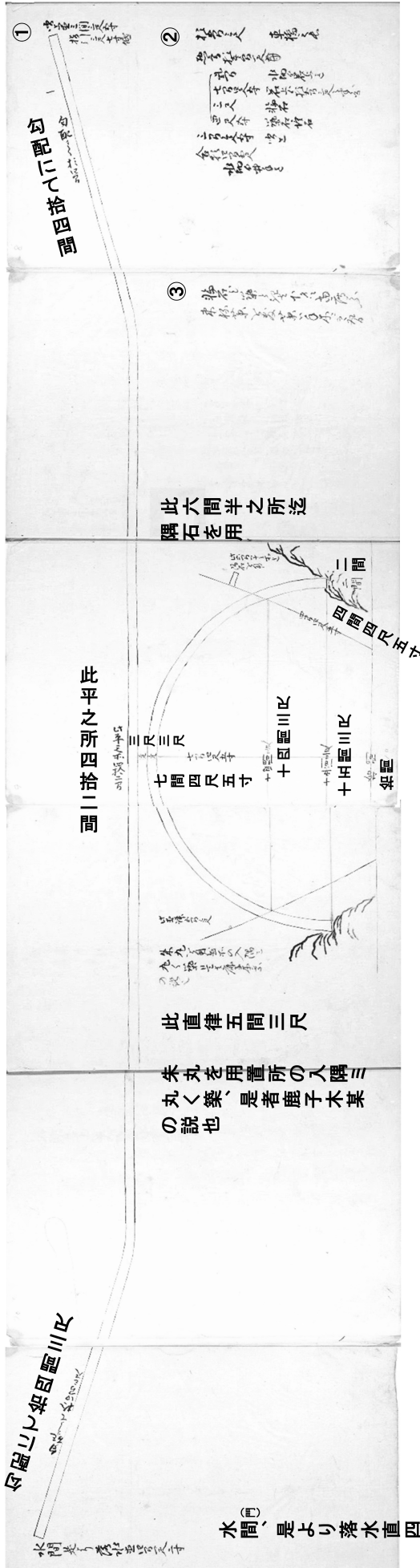
- 一、二間 足築立
- 一、五間 拾間半円之橋
- 一、三尺 橋輪石之厚
- 一、三尺 石垣

発旦之積

- 合八間
- 一、七間 吹上
- 合拾五間

此吹上直五間三尺九寸六歩
 繼延壹間一尺四寸四歩
 合六間五尺四寸
 指引 六寸低 低

(挿絵四)



① 吹上直三間三尺五寸
指引三尺七寸低

② 拾五間三尺 車橋之長
惣高拾壹間一尺五寸

式間 水面より岩上迄
七間四尺五寸 岩上より拾五間三尺之半円
三尺 輪石
四尺五寸 築石・塘石
三間三尺五寸 吹上
合拾四間五尺
水面より井手迄

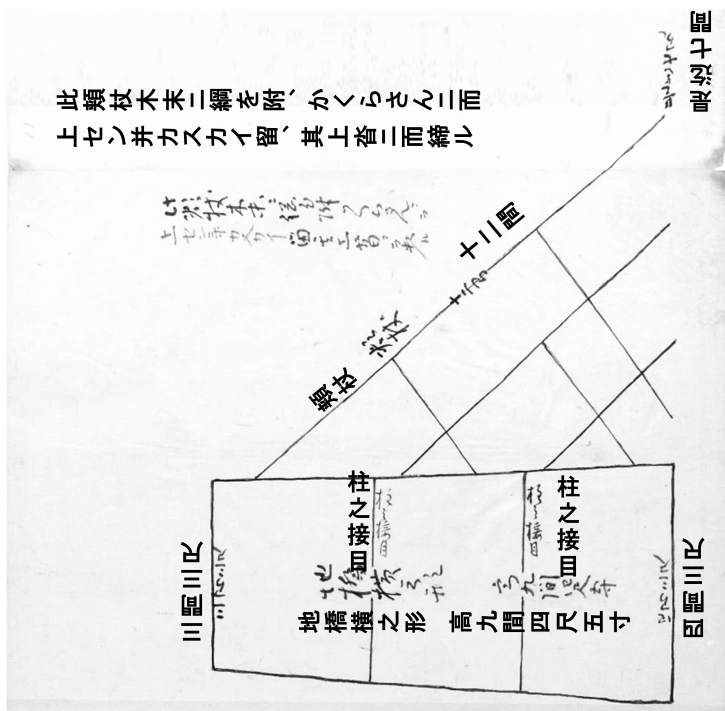
③ 輪石を築とき者下タ二当、薄よう
束ね藁を敷、藁八手木二而取る

水間、是より落水直四間一尺二寸

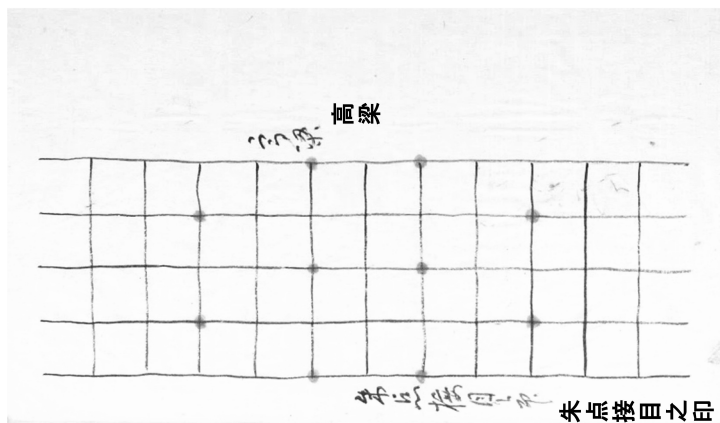
車橋地橋之事

水面より高九間七合五勺二及、双方より輪石と石垣築立る、重りにて左右に傾き、またハ双方より押寄る恐有り、故に材木切り合セ等深念を入ること第一也、上下に傾ぬよふにハ、柱三継ともに動ぬよふに三段ともに類杖にて堅、中・下段の高梁の接目は図に顕す朱点のとふり接く時ハ間透にて一とくさりに成る、輪の押寄ぬよふにハ留めゲタ真曲りの木を用、又上段の柱うへ木口の際、間毎に挽伐木を用ふ、神大上段間毎てを巧左の図に顕す、

(挿絵五)



(挿絵六)



車橋の事

輪石の厚、砥用橋の例をもつて厚三尺にて天幸なるハ、所には無類の石征には纜の剥にもツ、数重りつくハ割れかたきほど剛くして、至てねはり強く也、是第一の仕合也、しかるに輪石の喰合口、ツミわること有、是を防には築合の口を明け胴にて喰合よふにするとときハ、ツミ割ることなしと、坂梨某の説にて二寸五分宛口を明る、又功熟石工の論に石三板目・マサ目有り、マサ目合セハ割勝手と云、試るに其通りの剥有、故に板目合せにす、輪石の折を防には築合中窪く成ぬよふ、またハ唐臼踏ぬよふに築合を念の入るへし、